



信濃奇談

下

ル 4  
4643  
2





門 4  
號 4643  
卷 2



石寄法巻之下

駒嶽

堀内元鎧 録

駒岳を宮田の西よりあつて羽廣山を所村の誌  
崎よりとも山脈打はきありその高小記とあり  
く馬乃疾ともあり馬の疾あはれ河よ其の土は人  
行まへりわき高劫ありとて新水よ名名山靈  
秀の徳は及ぶ所なり山の頂よりたまたま駒乃嶺を  
あり寛永中よ屋敷乃有司上の命とて徳と山  
廻りせし時小鏡頂より駒は書ふ宛りしを忍びたり

し

早稲田 大学 図書館  
昭和 35. 7. 13 受  
藏 書





藤原家経  
 伊予の山  
 いくさの山  
 まさかたの山  
 のこの山  
 あつた山

錫杖岩

藤原家経



勒駒嶽銘  
 源俊豈  
 靈育神駿  
 高通天門  
 永鎮封域  
 維嶽以尊  
 天狗嶽

勒銘山

農池

松



風紙の巻  
 も飯田  
 乃一山乃  
 徳林の系  
 白山の幸  
 のみ風紙  
 やむゆゑ  
 子も誤り  
 里詞集集  
 庭経の歌  
 徴まへ

中野新吾軍集よりわたりて後山の頂より尾毛の木乃  
 枝よりわたりてあるひち馬糞なるもの有り紙に  
 せしむる安藤氏の記及田國筆土産等に見え  
 世の人あやう甲つあまて名山の徳も  
 人乃智力をそて測り知れざる事此多きとわ  
 せしむる靈物と書きし傳りたれも天正の  
 織田公マコトの法意を慕てく駒嶽と稱し良  
 馬と傳く軍用も傳へんと傳りたり  
 生害あるをせむひそのり止たりと云季物  
 語小乃人なるをそてみたりは神物と傳りて終た

まりしゆ急ふその咎とゆふひ  
 河もよと田國筆土産も馬駒の形小なりと云ひ  
 著聞集より大なるわとゆふと云はる神物なる  
 大やもたりしゆもあ繁變幻さる向りたるもの  
 小や

抱瘡

赤嶽乃里を福寫宿に西あり山深きふあり  
 むりよりその里の人抱瘡とゆふと云はる人  
 或人病む者あるを急せぬを此抱瘡と急せ  
 遠き所より抱瘡と病人とつけて介抱



○三  
さ世目致経く坊り家亦ゆわうくま初んそ  
の事亦結染るるやいふものなりと我甲斐ふ  
り播本宗毒也といふ醫士ありと説かすとい  
はまの取あすも沸嶽のくくり染ん疱瘡の種  
者毒のくくり病中華也とる晋建武中 本  
邦中くくり 聖武帝の御も中くくり多りぬその氣  
の人多ゆきゆきと沸ぬ天行疫氣也といふは又  
胎毒乃内より發する病也といふは人よる今  
傳染する病をぬき愈くも愈きこののわたりや  
く新毒沸るるをゆりくゆぬ沸嶽の里をり

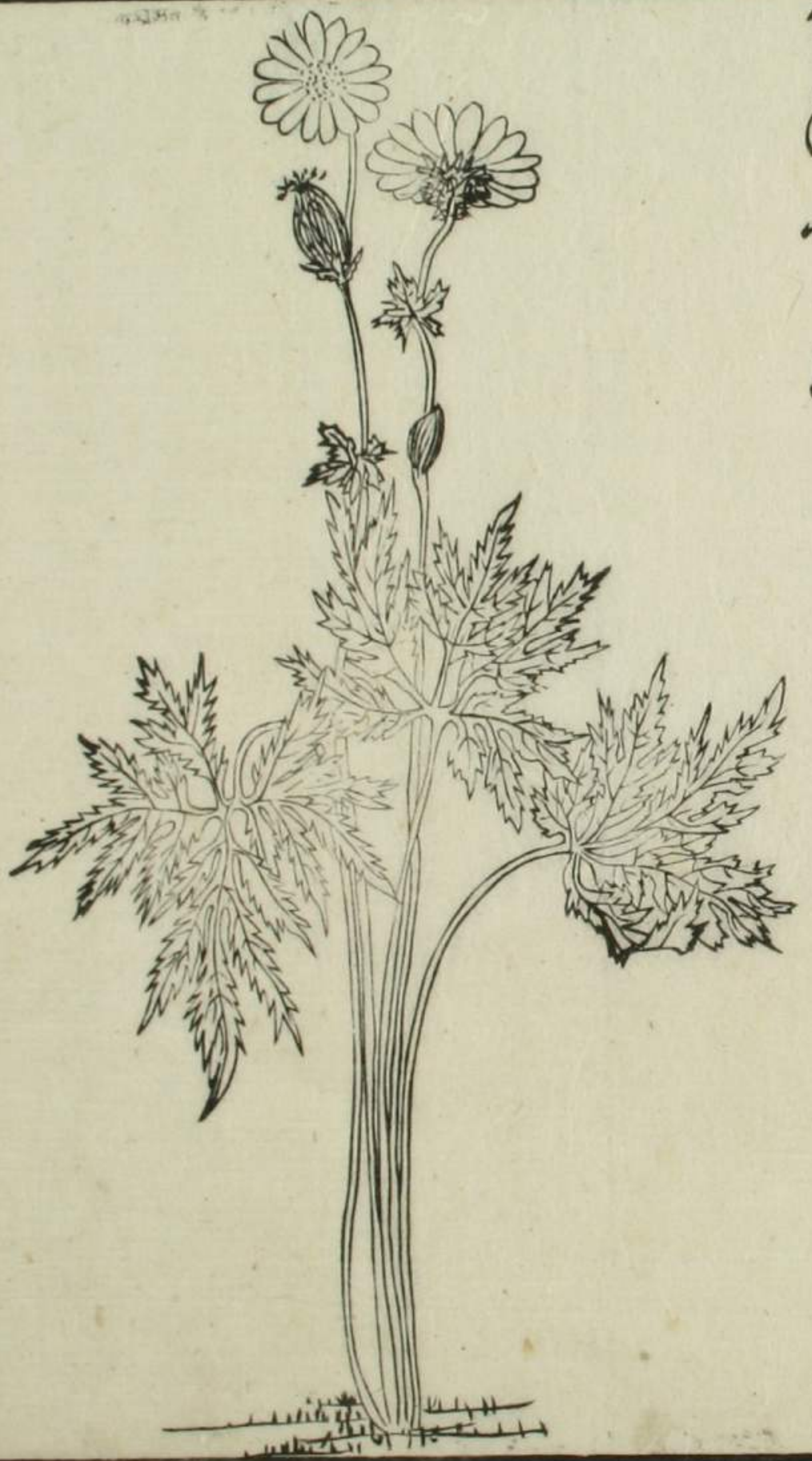
みもあく寸位ゆきと枯山の里まく飛驒乃白  
川夏流の苗木伊豆乃八丈嶋嶽後其妻有紀伊の  
熊野田坊乃岩國伊予の露峯土佐のふ枝肥前其  
大村をくくり五富肥後其く其等くくりも疱瘡を  
やゆりくあん韃靼乃疱瘡をゆきく其事ハ五雜  
俎ゆきとるまくくり播本氏の説くまくゆりく  
その種乃毒まくゆきもあくまくゆきと止むる  
はるの勢あり播本氏そのつと説くく其の二成  
まく次天地の間正邪あらひ行りく事く疱瘡の  
ふあくく其毒乃道と害する周尔揚墨土あり漢







再按... 唐の高祖永徽四年...  
 西域... 中国...  
 司... 世... 人... 乃... 役... 目...  
 氏... 憂... 宣...  
 鹹... 大... 和... 本... 州...  
 山... 菴... 院...  
 記... 七... 島... 日... 記...



たるし... 日記... 黄...







そらら古馬と夫ひくあふ付く後子漢方  
りきりめ神よ強ひ来せく弓矢當り大臣乃  
後始りく且斤倉村柳ひ遠く小も臣氏の  
附り多きまは大臣に属せし人乃孫なる  
命記事難き洋持も海よ伊豆の相根之高  
と効徳しそ西小洋を海出は是より名をせ  
少をの守を衛とち屋大連と名おれりとい  
ふるあつり神代の四地を夫ひぬる惜あり  
とふる

余別々鉾持事略とゆひく  
洋小連のれをゆり賛せす

徳本公翁

徳本翁ハ長田氏幹家と號しまゝ知長神やも  
號しぬりまのむれ人も知り或は並徳といひ  
或名を河といひ醫少達しそ汗吐下の音を南  
い巴豆閉子輕粉の如き劇劑といふやもそ沈あ  
れ向やと瞑眩と名れはしそ用ひたりと好む世  
の人或は攻劇家と名付てしそ若も河りそ家  
沉病痼疾乃愈難に病もそのまゝ愈りとの多  
きねも抄の名海内小龍しそ於甲州小龍中平  
如神しそ昔は甲斐徳本と稱しそなりと然り  
葉の價もぬりま十八錢と名ありとありと名士







仙人床

木曾上松宿寐覺の里多土俗傳々浦嶋太郎の  
伝も亦此地なることいひまこと浦嶋と云ふ  
漁者乃伝多事ゆりともいひ浦嶋の中ハ既俗  
説辨多小刀をもちて此は浦嶋を以て浦嶋を私  
小思ふよと喜翁小あつともや雍州府志に寛正  
年中武藏國河越有道導諱三喜者自號範翁又稱  
支山人及中年入大明留居十二年學東垣丹溪之  
術遂携醫家之方書歸本朝救療蒼生云云此人の  
亂世を厭ひて此の深山の中に入りて終老す

れりも知れぬ事々々今も其の事傳へて  
喜と云ふゆりゆり一述小訓して其のゆりとなせり  
らん於湯舟沃小吉田兼好の宅趾あり 兼好の墓あり  
遺 吉野拾遺 兼好と傳々々云んや屋鋪とあり遂  
小傳々々猿屋鋪とて唱ふゆり  
志略小 再按さるるに之喜翁と土人推々神仙と  
云ふは或假稱とて浦嶋を呼ぶる事とて遂  
り此兩人傳々々云ふや亦其の傳へり  
まもや 浦嶋の雄略帝の討つる事日本紀續日本紀扶桑略  
紀贈餘雜錄等小刀の今丹後の國網野乃社を浦嶋と  
祭るに於たりや怪談故事に因りて  
云々木曾小刀の事ありありあり



鷓鴣

鳴——つらき乃は少や貝沼の里より一人の武吏  
 ありてつらき鷓鴣一はつひ居るふとん弓とく  
 その雄多斌射たつり程強く清ふまて嶋島を捕  
 たりよあれ何のまやま——んふたつ鷓鴣乃首  
 鳴るつらき翼乃中ふつらてあ繁鷓鴣の必めく  
 何ふものありと貝原羽の候ふもんゆ彼武夫を  
 とるんくたつり感悟——弓矢捨てて僧とをたり後  
 小一寺と遠まに今乃鷓鴣山東光寺をぬりて  

 ねしつらき漢名鷓鴣の字とつらき中野ふつらき住  
 古よき鷓鴣の字とつらきひあれふつらき
 
 嶋島の

清く新くつらき日暮れをつらきとつらきひ——貝沼のま  
 菰うくれ乃を——の都へを懸やつらきつらき著聞  
 集のみちたつらき乃ふあつらきなつらきつらきつらきの清  
 奇よ白きつらきなつらきつらきつらきの致つらきつらき  
 菰うくれ乃つらきつらきつらきつらきつらきつらきつらき  
 鳥つらき歌のつらきつらきつらきつらきつらきつらきつらき  
 因縁集等小哉つらきつらきつらきつらきつらきつらきつらき  
 世ふ近江國をつらきつらきつらきつらきつらきつらきつらき  
 つらきつらきつらきつらきつらきつらきつらきつらきつらき

大蛇

大蛇



天正の比大くや村り大蛇伝るるより一々の名けきき  
る遠乃藩士小井深九郎兵衛少とてふ人あり打  
年角とて大刀掲げくるゆきとてあり叢の中ふ  
眠居るうと人あり首とうち落しけぬきあまた  
や語一洞の動く響き地震のこゝ其首と飛揚り  
井深と目うけく追来る井深を小沢の邊へ逃  
行しう今もあつたやと踏まう所とひききとて切倒  
し其身も扱とてり後所々あり漸くはり快復  
志けあつて新著の集りよん人あり今按とてり  
利本村小大蛇洞や語つたあまたりや村小由事

初ら大蛇乃伝ふも蛇あやとてんあり小平内  
記う天竺川まで大蛇切一平小平物語よん人の  
今も稀やら大蛇出るるのあり遊きとて後本出寫  
初よひ小河内の里人深山よん大蛇をんく逃  
るあり一若あり我任別と山よん山乃深を好  
ゆふの非常の物の伝も新と見えたりやや村そ  
ろきとてり

之婦人

元文の比本郷乃里ふとて龜とて二人の女あり  
々好いふ村人あり新著の集りよん人あり今按とてり



けりある河西岸寺の古刹の赤ふてんて  
橋を極る赤ふてんて赤ふ居るふ七久保村の  
さん中とて是も同く新橋を流るその事  
結くまなく二人の詩へ一首と題する

多も赤も甚やとて赤く赤く

赤く赤くの花乃らも赤くさん さん女

二人直ふ区歌きしもあ

赤く赤く赤く赤く赤く赤く

赤く赤く赤く赤く赤く赤く 清女

赤く赤く赤く赤く赤く赤く

これのむらあふまはわきん 亀女

そはまらさん女源清をまのくくつめさ終り  
人して無もああり清もああり源氏乃終い  
と人歌よみ源氏三枕とせんあつけく今の世と  
も清くもむら王徳の盛りもああり清河文華  
のりまらあ婦人乃文女ありと編あり  
一条天皇乃御時、朕う人文とゆ、事ハ前約ハ私  
り加まると清らせのひもああり御代も清  
少納言赤深右衛門等わはくあ六七人ものああり  
まらて水篤うふは清く山深き里とそのはああり



も士君子の礼を思ふを物知りうさむしよま  
 礼のり  
美濃傳信子哉すふある義仲 勇方義隆の法  
 名を授けしをせしむる武門の事あり 今や又  
 名を授けしをせしむる武門の事あり 今や又  
 華のりあ日即度昇平の清代にあつては  
 邊鄙乃新き婦人よりくわあ指河のりもど  
 ちつりさん女を嫁りし真くささの店  
 とひり往來の人ぬ茶酒を賣く業せし  
 たりやねん

木乃伊

新野邨といはれりのはるる死人乃朽敗をさるるあ

とそその姓名復歴る知れぬ人なりた行者のねん

呼奉りし是の紙は弘智法印の紙なりある弘智  
 幸

東奥紀行及山嶽奇談  
 等少詳し目んえんあり といひはれりは紙の芥沢り

て此人と紙のきり棺をやら形もなき皆朽果

ぬあふ戸をのり乾枯しくそのまきゆり是も

ありきりりりや姓名なきる知れぬ人なり戸名  
 あり

今もその里の泉法  
 隆りひるるあり 南留別志ありえたる奥乃秀衡

の五百年経たずとも朽敗せありし棺擲の制

もゆりもれりくもありねん志を棺もさるく土

乃層よちりは養へりりりりいりあや



西京雜記  
魏王子且  
渠家無指  
擲但有石  
折廣六尺  
長一丈石  
屏風牀下  
悉是雲母  
牀上兩屍  
一男一女  
皆年二十  
許俱東首  
裸卧顏色  
如生人又  
幽王家百  
餘屍縱橫  
枕藉皆不  
朽唯一男  
子餘皆女  
子

一説のふに、楚新のむらうのふは、小蕃藥の木乃  
伊とぬんい物即あぬあらんぬうぬ人數萬人  
のうちぬらたのつうかあもものあふりある  
アアア必宮國山のふはぬぬうふや職方外紀  
西歐邏巴乃一地の死者と山り移るはその尸子  
載朽もとらん人采覽異言小卧兒狼徳の塊を漢  
字にぬうく人物の生せうあう、和蘭人ある年と  
の國軍の衣糧屋具と備へく、いろうに人  
もゆあうのぬ、聖のぬゆうてんぬよ坐るあ若  
ら坐り卧すく、外にううぬ、ぬぬの如

皇朝類苑  
引倦遊雜  
錄曰華嶽  
張起谷岩  
石下有僵  
尸齒髮皆  
完  
関氏著  
世子發墳  
志小上州  
茂呂村の  
石室の中  
尸あり  
て侍伏を  
あう  
東奥紀行  
越後津  
川玉泉寺  
淳海上人

く、あう、ぬん、これ等の數は、その木乃伊  
の、あう、ぬん、及ひ、越後、ぬん、宮國、中々  
たあ、ぬん、の者、あう、ぬん、大く、中  
小彊蚕の生るあうぬ有る萬國新話よその  
説、ぬん、行力、あう、ぬん、古物、ぬん、雜  
話、及ひ、采覽、異言、木乃伊、熱喝、あう、人、比、焦、枯  
志、あう、ぬん、蘭人、あう、語、と、後、あう、  
唐僧義好とらぬのも死、あう、百年と  
和漢太平廣記、あう、ぬん、  
春山  
伊那の郡福を、あう、里、小、あう、席、あう、あう、農あり







よあやしくも昔て清らしくありその塚今も  
何れ

小松氏墓

入の首字良部小松氏の墓あり土人傳へて惟盛  
乃墓より平家物語に惟盛と潜行して熊野浦小  
釣り海に没入せりやんをり國史略小曰惟盛海  
に没入せりありあす晦跡して伊勢國安野郡に  
潜匿し承元四年二月念八日五十三歳と病没せり邑  
中其子孫存せり者二十一家隸属のほ二百五十  
餘戸ありやんけらる惟盛海に没入せりあり

らるる水と堤村よりあるゆもあはれ今も墓の

存せりありあり 入谷のうちに小松氏墓あり 建福寺に僧

文覺り穿てり池とあり新著聞集小蓮華寺

小文覺の墓ありとあり 新著聞集文覺ハ實朝公乃附

惟盛乃子六代と夾て反せり 或隱岐にそ流しぬる

をりよと遺跡の存せりあり ゆらゆらと六代

乃命は乞清 事もんゆきとあり 惟盛と法

をり ゆらゆらあり 源為朝と自

殺せり ゆらゆらあり 琉球と海り

南嶋志琉球事畧  
三國通覽等より



此の代朝は系系秀り本曾志略  
木曾志略 源義  
少子  
 経う韃靼つ道はの歌  
鎌倉實記及び ねんせ先  
蝦夷志小見  
 覺つしひら新考ふる山室邨遠照寺の持徳  
 子古徳又は康暦二年六月小松四郎源盛義とん  
 たりそのは地ふ少松氏ありく守良邨乃墓も  
 くれも人なる命一氏の同一はゆふ惟盛と誤  
 つしを新よりあや相給ぬ一上古乃事なす  
 けあくともさるや如く實ふ大史氏の嘆とて  
 此の地ふら

信濃寺後巻之下終

附録

王墓 松崎のあり土人傳く 敏達天皇の皇子頼勝  
 親王と葬なるをわるといふ日本紀及び皇胤紹運  
 録も証考あり頼勝親王といふ中らんを以て  
 此の地なるを地とて地とていふ事あるを以て  
 其人のいふ事あるを以て此の地なるを以て  
 うのめ植輪なるべし 此の地なるを以て  
 後后洞の地なるを以て地なるを以て  
 湯方と葬りしやあはれや河邊にもあはれ  
 の墳墓ある地なるを以て地なるを以て

付録







身とやららるるは... 敬感  
 乃あまう前...  
 信清...  
 是...  
 大房丸墓 小出村...  
 遠流...  
 按小大房丸...  
 藩翰譜...  
 國地...  
伊勢の伊東氏も  
その子孫なり

堀内玄逸墓表

堀内元鑑一名鮎字魚卿號管齋父中邨元  
 恒信州伊那人母北原氏家世業醫元恒初  
 試業各處元鑑生于上穗長于大出既而元  
 恒就仕高遠專任儒職元鑑從季父玄三受  
 業于山寺業已成出為松本堀内玄堂義子  
 玄堂其仲父曩出嗣堀内氏者也翌年仲秋  
 有疾荏苒不愈今茲己丑二月十四日終沒  
 享年二十有三葬松本城北澤邨賢忠寺後  
 山元鑑為人負信慤實口絶不道人之過惡



善事繼母矢野氏及義父母未有疎意是以  
皆視之猶所生合族感賞他人亦聞其死莫  
不哀慟其祖淡齋翁以善俳諧歌聞元鑑亦  
好之元恒聞其疾病走往視之實危篤也請  
題一句額而揮毫蓋其舊題得意句也舍筆  
即瞑悲哉已葬元恒左祖右還其墓曰嗚呼  
汝之不壽命也松本汝祖先墳墓所在汝今  
死首其丘其安之文政十二年二月高遠教  
授中郎元恒識

書物  
信州松本本町二丁目  
元恒識



